

所 陵

No.13

関西大学考古学等資料室集報

昭和61年 5月31日発行



銅製壺鈴一隻(伝関東地方出土)

目 次

武事には金鐸を振う—古代中国の場合—	2
高句麗の寺院跡と壁画古墳	4
テベ・シャルクの土器片のことなど	6
石人・石碣の資料について	8
昭和60年度調査報告「オホーツク地方の遺跡と博物館」	10
新収資料 他	12

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の35(06—388—1121)

武事には金鐸を振う—古代中国の場合—

横 田 健 一

『周礼』にみる軍用金鐸

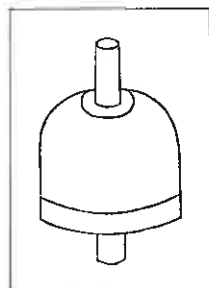
前回第12号には、古代中国に山川を祭るばあい、兵器を持って舞い、またその山川に兵器を埋める風習のあったことを記した。これによって、わが国の古代祭祀遺跡から兵器の出土する事例と比較に供しようと考えたのである。

わが国の弥生時代の祭祀遺跡から400例以上も銅鐸が出土している。これを多くの日本の学者は、農業共同体の祭祀に用いたものとしている。中国では、はたしてどうであるか。

もっとも、ここに注意せねばならぬことは、わが国の銅鐸が、中国で『周礼』等の古典にいう金鐸と同じものか否かが問題である。中国の鐸は『周礼』巻12「司徒教官之職・鼓人」条「以金鐸通鼓」の註に「大鈴也、振之以通鼓。司馬職曰、司馬振鐸」とある。鐸は大鈴である。鐸が鐘と異なる点は、鐸は中に舌があって、それが揺れて、周囲の内壁にあたって音を出す。これに対して鐘は、外壁を棒でたたいて音を出すのである。そして鐘は編鐘のように音階を出す16（または24、または14）個を大小の順にならべ、異った宗廟社稷の祭その他の交響楽の演奏に用いている。

これに対して、鐸には木鐸と金鐸とがあり、清欽定『礼記義疏』附録礼器図巻4に示すように「文事振木鐸、武事振金鐸」とあって、天子の教令などの文事を多くの人に知らせる時に、木鐸を鳴らして、人を集めて、知らせた。

これに対して、金鐸は武事すなわち軍隊を動か



木鐸(漢文大系17「禮記」礼器図、巻4より)

し、戦争に用いるものである。

『周礼』巻29「司馬政官之職・大司馬」条によると、軍用の打楽器には鼓、鐸、鐃、鑠があり、その各々を身分階級と軍隊の大小の規模によって使いわけるのである。

王は路鼓を執り、諸侯は賁鼓をとり、軍將は晉鼓をとり、師帥は提をとり、旅帥は鼙をとり、卒長は鐃をとり、両司馬は鐸をとり、公司馬は鑠をとる。その条の註に鼓人曰として次のように示す。

路鼓は鬼亨すなわち死んだ人の祭に用いる。賁鼓は軍事にたたく。晉鼓は金奏に鼓すとあるが、金奏とは、楽を奏するにあたって先づ鐘を鳴らすこと、奏樂中の節目に鳴らすようである。これは『周礼』巻24「宗伯礼官之職・鐘師」条に「掌金奏」とあり、註に「金奏擊金以為奏樂之節」とある。提とは、馬上で鳴らす太鼓で、太鼓の上に曲木の提、すなわち、台上に2本の支柱があり、上部が彎曲した半円上の弧をなし、中央に小太鼓をぶら下げていて、これが鞍の前に装着され、進軍中に、馬上でこれを鳴らすのである。昨年9月中旬に阪急百貨店で高句麗文化展が開催されたが、その陳列品の中にも、壁画にもみられ、高句麗が5世紀頃まで『周礼』の軍制の楽器を用いているのに、私は驚いたのであった。

なお、『周礼』にみられる周代の軍隊の編制規模は、次のようになっている。すなわち、兵12,500人を軍とし、王は6軍を、大国は3軍を、次国は2軍を、小国は1軍を有する。1軍の軍將は皆、卿を命ずる。2,500人を師となづけ、その司令官を師帥といい、皆、中大夫とする。500人を旅と名づけ、その指揮官を旅帥といい、皆、下大夫とする。100人を卒と名づけ、卒の長は皆、上士とする。25人を両と名づけ、両の隊長を両司馬といい、皆、中士とする。5人を伍と名づけ、伍には皆、長がある。このようにおおむね5の倍数で部隊の規模を編成する。

さて元にもどると12,500人の軍の軍將が晉鼓

を、2,500人の師の師帥が提といわれる馬上の太鼓で、500人の旅を旅帥が鼙という太鼓で、坐作、進退、疾徐、疏数などの軍隊の行動を指揮し、動かすのである。

やはり大部隊は、遠くまで響く太鼓で動かすが、もっと小部隊になると金属の打楽器を用いる。100人単位の卒の部隊は卒長が鐃、すなわち銅鐃か鐃鉢（銅板・2枚を叩き合わせる）をとって指揮する。25人単位の両という小部隊は、隊長の両司馬が鐃を振って号令する。5人単位の最小部隊の長である公司馬は鐃をとって号令する。

このようにみると、周代の金鐃は、むしろこの頃には未だ鉄はないから銅鐃であろうが、きわめて小さい、25人に聞える程度のものであったろう。現在、わが国で出土する最古期の銅鐃は高さ10cm内外であるが、おそらく、この程度のもので用が足りたはずである。

2. 日本弥生時代の銅鐃

以上のように中国古代の金鐃は25人程度の小部隊を動かすための、中に舌のある、振り用いる小鐃であった。わが国の銅鐃の初期のものは、小鐃であり、中に舌のあるもの、その痕跡のあるものは、10例ばかりあるようだが、後期・末期の巨大化した高さ70～80cm以上にも及ぶようなものは、中に舌もなく、中国人が見たならば、鐃とはいわず、鐘というであろう。

しかしこれは初期の鐃から、日本古代人の好みに従って2～3世紀の間に巨大化したにすぎない。元来は小鐃であった。

日本の銅鐃は伴出遺物がなく、ただ銅鐃のみの単独出土のばあいが少ない。しかし近年伴出遺物として兵器を伴うばあいが少ない。

例えば神戸市灘区の桜が丘では銅鐃14個と銅剣7口とが伴出した。出雲の志谷奥では銅鐃2個と銅剣6口とが伴出している。そして一昨年から昨年になつて、出雲の荒神谷では銅剣358口が出土の後、その僅か6mの隣から銅鐃6個と銅矛16口とが出土しているのである。このように銅鐃と銅剣・銅矛のような兵器とが伴出していることに、私たちは特に注意して考察せねばならない。

すでに述べたように、中国では、兵器は山川の

祭に用いられ、その祭の舞にそれを持って舞い、またこれをその山川の神に捧げて、これを山ならば埋め、川ならば川に沈めたようである。そして金鐃を埋め、または沈めたという記述はないが、金鐃そのものは、軍用の楽器であることを思うならば、金鐃と兵器とが共存して発見されることは、さして不思議ではあるまい。

日本のばあい憶測すれば、日本へ渡来して来た大陸の人たちが、銅鐃も、また銅製兵器も持って来たにちがいない。むしろ、それはセットとして持って来た集団もあろうし、そうでなく別々に持って来た集団もあろう。

わが国で現在まで発掘され出土した銅利器や銅鐃の年代は、おおむね後漢代から三国時代に相当するであろう。

三国時代の歴史を記した『三国志・魏志東夷伝韓伝』に韓族が5月に下種をおわって、つまり稲の種を蒔きおわるか、田植をおわって後、鬼神を祭った。その群聖の歌舞に、数十人が、ともに^な起ち、相したがって地を踏み低くたかく、手足相應じ、節奏鐃舞に似たるありという、10月に農耕をおわった後も、またかくの如しという。

この鐃舞がいかなるものか分らないが、日本でも古代以来、宮中の鎮魂祭、すなわち新嘗祭の前日に行う行事に、矛の先に佐奈伎をつけて舞う踊りがある。佐奈伎とは鈴であるとの註が『延喜式』にある。これを舞うのは猿女氏の一族の女性で、猿女氏の祖の天鈿女命^{あめのうずめ}は、天岩戸の前で、天照大神を天岩戸からひき出すための踊を行った。その時に『古語拾遺』によれば、竹葉^{きなば}と猷毼^{うけふね}の木の葉を手草とし、手に鐃をつけた矛を持って誓槽^{ちき}をふせ、その上で踊り舞ったという。

日本では鐃と矛とがセットになって、舞踊の際の手草となったのである。鐃舞とは、こういうものであろうか。いずれにせよ、鐃と兵器である矛はセットになりやすく、かつ祭儀に使用されたのである。

日本の弥生時代の銅鐃がどのように用いられたか不明であるが、中国の風習を参考にすれば、山川等の祭に、原初は用いられ、祭舞において舞人が兵器と共に持ち踊り、終了後、埋められた可能性が高いと、私は考える。

高句麗の寺院跡と壁画古墳

網 干 善 教

1986年4月10日から約10日間、朝鮮民主主義人民共和国社会科学院の招請をうけた日本学術文化代表団の一員として、高句麗時代の遺跡、遺物の調査のため訪朝した。滞在したのは平壤市であるから、行動の範囲は平壤周辺だけに限られるが、それにしてもここには壁画のある高句麗古墳が群集し、高句麗の山城や宮跡、寺院跡もあって考古学研究者にとっては必見に値する地域であることはいうまでもない。また、博物館の見学は大学における博物館学の関連科目の担当者として役立つことが多々あった。訪朝の目的はあくまで考古学上の調査研究と博物館関係施設の見学であって、それ以外のことは一切なかった。訪れたのは壁画古墳では1979年12月、平安南道大安市徳興里で発掘され、多彩な壁画と永楽18年12月25日在銘の墨書が検出され注目された徳興里古墳、この徳興里壁画古墳から約3km西の平坦地に鼎立する三墓里の江西三墓であった。なお安岳3号墳については朝鮮中央博物館において、実物現寸大に復原されたレプリカを見ることができた。江西三墓のうち大墓の四神図、特に東壁の青竜図と奥壁の玄武図は飛鳥高松塚の四神図と対比で両者の類似性が論じられる壁画である。

山城では大城山城跡、宮殿遺構はその山麓にある安鶴宮跡と大同江岸にある大同城跡、寺院跡は

発掘調査の成果が研究者によって注目されている定陵寺跡をつぶさに見ることができた。また、昨年9月14日宝塚で開催された「高句麗文化展国際シンポジウム」と本年5月24日、東京での同様のシンポジウムのパネル討議に参加し、いくつかの問題点について討論することができた。本稿では特に定陵寺跡についての見聞と2、3の問題点を挙げておきたい。

高句麗が平壤へ遷都するとき始祖王である東明王陵を遷移した。この東明王陵のある丘陵の南側約120mから400mの平坦地は畑地となっている。水害等によって寺域の一部が流失しているが建築跡のあることは以前から知られていた。この遺跡が東明王陵と何らかの関係があるのではないかと考えられていたが、遺構の規模や性格については確証できなかったらしい。そこで1974年から大規模な発掘調査が行われた結果「定陵」あるいは「陵寺」などの文字瓦片の出土によって、これが「定陵寺」であったことが判明、同時に八角堂を中心として東西233m、南北132.8m、総面積29,614.4m²に及び広大な寺域があり、18棟の建築跡とこれをめぐる回廊跡の全容が明らかにされた。従来その調査結果については十分知ることができなかったが、昨年の4月5日付で発掘調査を担当した金日成綜合大学編『五世紀の高句麗文化』（雄山閣考古学選書23）が出版され、概要を知った。ただ、そこに掲載されている図面は精度の高いものではなく、詳細に検討するには不十分であった。そこで昨年9月14日の宝塚国際シンポジウムで発掘調査に従事された考古学担当者に若干の事項について確認を行った。その一つは定陵寺跡は八角塔を中心に北側中央と東西両側に金堂を配置するいわゆる一塔三金堂様式で飛鳥の法興寺（後の飛鳥寺）の源流であるとされる。しかし発表された図面を見ると伽藍中軸線と八角堂の南面



定陵寺跡の全景

にある門跡の中軸線が約15m 偏っている。これは不自然なことで、主要伽藍と南側の門の関係について、再建という問題もふくめて時間的な前後関係があるかどうかということであった。これに対して共和国側は門は再建されたいという解答を得た。ところがまだ疑問な点があった。伽藍配置の中心となる八角の建築遺構が果して重層の塔か、あるいは八角堂のようなものであるのか。また、図面をみる限り基壇が二重のようであり、もしかすると重成基壇の構造ではなかろうか、と考えた。また東西両金堂と呼ばれている建物はシメトリックでなく、建築規模にかなり大小の差がある。この建物が果して金堂かということと、さらに北（正面＝中金堂）にある建物と八角形建築との間に回廊があることなどをふくめてなお検討する必要性を感じていた。

今回、短時間であったが、この定陵寺跡を見学した。すでに発掘調査が終り、ある程度整備されていたので、そのあたりの細かい観察はできなかったが、やはり問題があるように思った。このことについて、本年5月24日の東京国際シンポジウムで質問したところ、一塔三金堂の伽藍配置であるとの説明を得たが、なお検討を要する問題があるということで終った。回廊のところどころに柱間の広狭があり、これも建物の条件としては重要な課題であるから、今後機会があれば意見を交換したいと思っている。

徳興里古墳は墨書銘の「永樂18年12月18日」から高句麗第19代広開土王の治世、陰曆を陽曆にすると西曆409年1月26日で、5世紀初頭である。

江西大墓は社会科学院考古研究所副所長であり、共和国における著名な高句麗壁画古墳の研究者である朱栄憲氏によれば7世紀代であるとされる。そうすると二墓の古墳の築造年代には約200年以上もの開きがある。



平壤東明王陵の全景

両古墳を見学したところ、徳興里古墳は南面に傾斜する丘陵端の高い位置に立地し、江西三墓は平坦地に築造されている。しかも徳興里古墳から眺望すると眼下約3kmほどのところに見下すことができる位置にあることを知った。これによって徳興里古墳の壁画と江西大墓の壁画が内容的にかなり相違することの理由が理解できたし、古墳の立地のみならず、石室の構造や壁画や天井に描かれている壁画についても知見を得た。すなわち徳興里古墳は厚さ約10cm位の厚みに塗られた漆喰の上に描かれているのに対し、江西大墓は従来から知られている如く、大きな花崗岩の切石の面に直接描かれ、こうした構造上にも時代的な差のあることも了解できた。ちなみに江西大墓や中墓、特に中墓の朱雀図は写真とは違って、その迫力に圧倒された。「百聞一見に如ず」とはこのことかと思った。

「学問に国境はない」といわれる。古代において高句麗と日本の間には深い関係があったことは史料においても、文物においても知ることができる。文化史的に「高句麗」と「日本」の関係をより明確に、客観的に観察し、実証的研究をすすめるためには、純粋な学問の立場に立っての交流が望まれることを痛切に感じた。

テペ・シャルクの土器片のことなど

加 藤 一 朗

むかし（昭和32年9月16日）イランの著名な先史遺跡テペ・シャルクで採集した土器片（写真）を、このたび新らしく作られた考古学の第2陳列室に展示していただくことになり、ついでには採集のいきさつなどについて書き残してほしいという網干善教教授のお言葉があり、この小稿を草することになった。筆者としては専門外の領域に足をふみだすことになり、拙稿も断片的・雑報的なものになる危険が多分にあるのであるが、関心のある方には直接実物を見ていただくこと、また機会があればイラン考古学の方に調査していただくという前提のもとに、以下記すことをお許し願いたい。

それはたまたま三笠宮様を会長にいただく日本オリエント学会が発足してまもないころで、やはり宮様を団長にあおぐ、東大関係の方がたを中心とする、数次にわたるかなり大規模なイラン・イラク発掘隊が派遣されつつある時のことであった。その対象はおもにイラク北部のテル・サラサートであった。京都では故足利惇氏先生（当時京大文学部教授）を中心に西南アジア研究会が創始され、やはり西アジアに調査隊が送られることになった。これは小規模・短期のものであった。まず吉田光邦氏（現京大名誉教授）を隊長とする第1陣が派遣された。目標がイラン高原にえらばれたのは、足利先生がイランの政府・学界と長いおつきあいがあったことと、研究会顧問の岩村忍先

生（現京大名誉教授）が当時の駐イラン大使山田氏と親交があったからであった。そのあと第2陣として筆者たちが派遣されることになった。筆者は京大助手から本学専任講師（西洋史）にかわってまもないころで、ひきうけたものかどうか迷ったが、西洋史の長老教授であられた故原弘二郎先生に相談申し上げたところ、教師の仕事では教育がもちろん第一だが研究も大事だからと、参加を認めて下さっただけでなく、資金の僅少なことに同情され、友人の出光興産の重役に頼み、同社のタンカー日章丸に便乗するよう取計らって下さった。事実資金はとぼしく、今日の円高からは想像もつかないドル高・ポンド高の時代で、正直なところ経済的にはかなり危険な企画であった。筆者の同行は京大大学院生田中琢君（現奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター所長）と京大生高林君（現印刷会社経営）とであった。実は同じく京大生であった岡崎正孝君（現大阪外大教授）も計画の中に入っていたが、資金の関係で、出発間際になってから参加を思いとどまってもらった。このことは筆者にとって長く心の重荷となったが、その後同君がテヘラン大学に留学する機会をもたれたので、やや心の安らぎをおぼえている次第である。

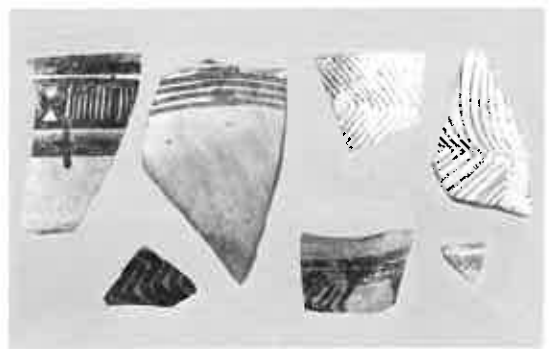
さて出発（7月22日）。「ともかくオリエントは広いのだから、その広さを体感してくることだな」という足利先生のお言葉を胸に徳山港から出航した。往路も帰路も日章丸のお世話になり、ともに20日間かかった。航空機の発達した今日からすると、まさしく牛歩のスピードであったが、それだけに「海のシルクロード」の道のりをちょっぴり体感することができた。イランに入ってから、航空機はほとんど用いず、汽車・バス・タクシーで、レー、イスパハン、ナクシルスタム、ペルセポリス、シラーズ、テペ・シャルクなどをめぐった次第で、足利先生のおっしゃったイラン高原の広大無辺さには圧倒された。テペ・シャルクへはテヘランからタクシーで往復した。同行は筆者ら3名のほか井本英一氏（現大阪外大教授、日本オ



写真A イラン土器(上下10.7cm 左右10.1cm)
(最大のもの)

リエント学会理事)——当時加賀谷寛氏(現大阪
外大教授)とともにテヘラン大学留学中——と井
本氏の友人でポーランドからの亡命学者とであっ
た。テペ・シヤルクそのものは、畑の中の一見何
のへんてつもない丘で、現地の農民たちの間にも
あまり知られていないようであった。しかし、フ
ランスのR. ギルシュマン博士が多年発掘・調査
されたところで、細長いトレンチが掘られていた
ほか、1箇所は大きく矩形型に掘りさげられてい
て、博士の研究のあとは歴然としていた。丘の上
は発掘の結果であるポットシャード(土器片)で
おおわれていた。帰路税関を無事通過できるかど
うか懸念されたので、筆者ら3名はめぼしい土器
片を数個づつ採集して、リュックサックの底におし
こんだ。そして何とか無事もちかえったのが写
真のような土器片である。過日訪れた東京都三鷹
市の中近東文化センターのイラン土器や土器片の
展示から類推すると、写真Aの3点は古いもの(前
5世紀ごろのもの)で、ロクロは未だ使用されて
おらず、厚手でイラン土器の特色を充分に表わし
ていない。写真Bの7点は前4世紀ごろのもので、
薄手でロクロを使用しており、イラン土器の特色
をよりはっきりと表わしていると思われる。写真
Bのものについていえば、地色は茶色・薄褐色・
黄褐色・灰色にわたっている。これらは恐らくか
なり焼成温度の高いもので、いかにもかたやきの
感じである。もちろんエッグシェル(卵の殻)と
よばれるものの薄さには比べられないが、かなり
薄手で、しかもかなり大きな容器を構成する力を
もっていたように思われる。これを見てある日本
考古学の専門家は「いかにも乾燥地帯の土器だな」
という感想をもらされた。あの丘の上の土器片の
量を想いおこすと、今日風にいえば、太古におけ
る土器焼成に用いられた大量の薪^{たきぎ}取得のための
伐木がイラン高原の砂漠化に役買っていたよう
にも思われてくる。

さてテペ・シヤルクから話がそれるが、その節
訪れたナクシルスタムで見た「拝火教のためのた
てもの」と呼ばれている直方型の石造建築は、一
見今日の小さなビルのような感じで、以来長いあ
いだ「アケメネス朝よりもはるか後代のもの」で
はないかという気がしてならなかったのである



写真B イラン土器(上下10.3cm 左右6.5cm)
(最大のもの)

が、先年機会があつて本田實信氏(現京大名誉教
授)にこの点について質問したところ「あれは古
いものと思う。最近あの建物のファサードに当る
部分がパサルガダエで復元されている」というき
わめて明快な答えがかえってきた。そういわれれ
ば、ナクシルスタムの建物の石の積み方がパサル
ガダエのキュロス大王の墓の石積みによく似てい
ることに気がついた。さすがに専門家の意見は貴
重なものにつくづく感服した次第であつた。また
イラン高原は文字通り広大無辺であつたが、諸所
に岩山の連りが見られて、それらがそれぞれ一大
平原を区切り、その間にたがいにはひどく距離をお
いて点散するオアシスの景観はきわめて印象的で
あつたが、たまたま最近本学大学院のY君の修士
論文を読む機会があり、そのなかに「イランの共
同体の独立性もしくは孤立性の伝統」といういみ
のことが述べられていて、筆者の現地でえた直感
とY君の研究の一端とが計らずも完全に一致した
ように思われた。なお現在新鋭のイラン史家川瀬
豊子氏に本学に非常勤として出講していただいて
いるが、川瀬氏は大阪外大から大阪大学に進まれ、
そこで大学院をおえられた方であるが、外大では
上記の井本氏や岡崎氏の指導をうけられたとい
う。その川瀬氏は最近イラン高原を旅され、革命
後もペルセポリス等の遺跡が健在であることを確
認されたという。筆者たちがテペ・シヤルクの上
に立ったころ、同氏は生れられたか未だ生れてお
られなかったころではなかったろうか。時の流れ
をしみじみとを感じる次第である。

石人・石鞆の資料について

角 田 芳 昭

墳墓や墳丘の表飾として用いられた石造彫刻に「石人石馬」と総称されるものがある。人馬の他に鳥獣や武器武具、器財などもある。福岡県南部から熊本県と大分県東部の筑後、肥後、豊後地方と山陰（一例のみ）から出土している。本学にも「石人頭部」と「石鞆上半部」を所蔵しているので、ここに紹介するとともに、その意義についても考察してみたい。

この資料は旧本山コレクションの一部で、2例とも昭和15年9月27日付で重要美術品に指定された資料である。そこで指定までの経過について考えてみる。すなわち、明治政府は文化財保護施策として法令を定め、文化財を指定し保護をはかった。

まず1.「古器物保存法」（明治4年5月23日・大政官布告）2.「古社寺保存法」（明治30年6月5日・法律第49号）、続いて3.「史跡名勝天然記念物保存法」（大正8年4月10日・法律第44号）4.「国宝保存法」（昭和4年3月28日・法律第17号）5.「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」（昭和8年4月1日・法律第43号）などが制定された。そして戦後において6.「文化財保護法」（昭和25年5月30日・法律第214号）が制定された。これは前記の法律を統一するとともに、無形文化財、民俗資料、埋蔵文化財を保護の対象として加え、全般にわたって保存および活用についての制度を体系

的に整備したものである。これらの法律のうち、本学資料が指定を受けているのは第5の「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」で、次の如く記載されている指定書が2通ある。（書類縦書）

昭和15年9月27日

文部省 ㊤

本山彦一 殿

貴殿所有ノ左ノ物件本日昭和8年法律第43号重要美術品等ノ保存ニ関スル件第2條ノ規定ニ依リ認定セラレタリ

右通知ス

1 石人頭部 1 箇 福岡県八女郡吉田村出土とあり、同文にて「1 石鞆上半部 1 箇」とある。これに関連する調査として安藤孝一氏が『MUSEUM』（第391号・昭和58年10月号）に「新指定文化財紹介石人石馬の資料」として詳細に発表されている。これによると石人石馬の資料は8件が重要美術品に認定されている。最初の認定は昭和10年5月20日付で「石馬（旧鳥取県西伯郡淀江町大字福岡字坪根垣所在）」とある。つぎに昭和10年9月4日付「武装石人（熊本県下井手神社境内所在）」とある。続いて昭和11年11月28日付で4件の指定がある。「武装石人残闕（福岡県八女郡豊福所在）」「石人」「石人頭部」「石槿」（3件いずれも福岡県八女郡吉田村岩戸山古墳所在）。そして最後に本学の資料2件が収録されている。これら8件の認定資料のうち、鳥取県出土の石馬は昭和34年12月18日付で重要文化財に格上げ指定された。これが契機となり、石人石馬関係資料の保存ということで調査された結果、福岡県の5古墳、熊本県9古墳、大分県2古墳、鳥取県1古墳の17古墳より出土していることが判明した。これらの種類は人物像としての男女、武装石人、裸体石人をはじめ、武器武具類として短甲、桂甲、鞆、盾、剣、刀、刀装具等があり、器材石造物として翳、蓋、胡床、壺、埴があり、鳥獣類は馬、鶏、犬、その他家屋など多種類にわたっている。（逸文に石殿、石蔵、猪の記録が見える）これらの石材は阿蘇山を中心に広がっている阿蘇溶結凝灰岩とよばれる灰黒色の比較的加工しやすい岩石である。実物大のものが相当数あり、表面に彩色を施したものが多数ある。これらの石人石馬が大量に出土したと



石人頭部（上下55cm 左右35cm）

伝えられるのが岩戸山古墳である。

福岡県筑後市と八女市および八女郡広川町の二市一町にまたがって、東西に連なる八女丘陵は一大古墳密集地帯であり、群中最大規模の前方後円墳が岩戸山古墳である。古来より注目されており、また研究されてきた結果、これが筑紫君磐井の墳墓とされるのが定説となっている。磐井は「筑紫国造磐井の反乱」として、大化前代における地方豪族最大の最後の反乱として『日本書紀』に特筆されている史実である。『継体天皇21年（527年）反乱』この北部九州随一の豪族が筑紫君であり、この地方の盟主として君臨していた。そして石人石馬類で墳墓を表飾し、勢力を誇示していたものと考えられる。発見されている石人石馬類が最も多く、群を抜いている。そして別区と呼ばれる場所にはある物語が想定でき配列の石人石馬がめぐらされていたという。また形象埴輪もこの場所から多数出土している。この権勢を誇っていた磐井の勢力にきょういを感じた大和朝廷は反乱という汚名をかぶせ1年半にわたり、攻撃し、ついに平定してしまったものと考えられる。そして乱後は石人石馬の古墳の表飾が禁止され、これを最期に姿を消していったのである。

本学の石人の顔面は非常に摩滅し、目鼻口等が判明できないくらいである。このことについて次のようなことが考えられる。石人の所在する地方の庶民信仰によると、この地方には眼病、腹痛、その他諸々の病にかかったとき、自己の個所と石人のそれを交互に撫でることで病気が平癒し、また穢や災を祓い棄てることができると思われていた。後世になると撫物信仰より転化した風習とし



石軀上半部（上下38cm 左右47cm）

て、この石人の顔面、鼻、口、腹部の部分を取り、その切粉を食後茶と共に飲むと煎じ薬として効用があると伝えられ、住民はお詣りのたびに、少糧を槌などで打ち砕き持ち帰ったという。

福岡県調査報告書（昭和8年）によれば、次のように書かれている。「信仰の対象としての石人・石人山の石人は貞享元年郡司吉田孫之丞、古賀組の大庄屋稲員孫右衛門に命じて、堂を立てしめたりという。木槌を以て石人を打てば、手痛足痛及腰痛等に悩める者、竝耳遠き者に対して、靈驗ありとして参詣する者多く、石人の顔面部は殊に毀損甚しく、堅固に堂扉を鎖すとも、日ならずして、開放せらるるを常とす」と報告されており、その信仰の状態を良く現わしている。

多数の石人石馬類が古墳を表飾していたが、6世紀前半より中葉にかけ突然に消滅してしまう。このことは何を意味するものであろうか。やはり磐井の滅亡に関係があるといわれる。すなわち継体天皇のとき官軍に1年5ヶ月反抗・反乱し交戦の上平定された。磐井は斬られた。官軍の兵士たちは怒りを石人にぶっつけ石人の腕を打ち切り、石馬類の頭を打ち落したという。この反乱が西暦527年であり、乱後、大和朝廷の支配体制が強化され、石人石馬による表飾が禁止された。そして表面の表飾が禁止されたことで、その結果絵画として地下の石室を装飾するようになった。すなわち彩色壁画の発達につながるものではないかと考えられている。石人石馬の意義・研究史等については別の機会にゆずる。



岩戸山古墳（『日本史・空から読む』より）

昭和60年度調査報告「オホーツク地方の遺跡と博物館」

本学資料室には若干の北海道出土の土器・石器等を所蔵している。そしてこれら資料について毎年出土地の調査研究を行ってきた。60年度の調査は北海道の札幌学院大学において「全国大学博物館学講座協議会全国大会」が開催されたので、この機会を利用し、調査と博物館施設等を見学したので記録しておきたい。

6月17日、網干善教文学部教授（資料室管理運営副委員長）と共に、早朝伊丹空港を発ち、札幌より乗換え女満別空港着、石北本線にて紋別郡遠軽町到着、地元の研究者本吉春雄氏（遠軽地区広域組合総務課長）柿丸訓氏（遠軽町社会教育課長）、紋別市立郷土博物館学芸員佐藤和利氏の出迎えを受ける。

まず「遠軽町郷土館」を見学する。開拓時代に使用した農耕具などを、当時の開拓住宅を再現したものとともに展示されており、郷土資料を研究する上で非常に参考となるものである。次に「遠軽町先史資料館」を見学する。2階建の瀟洒な建物で、地元より出土した多量の石器類が展示されている。特に湧別川上流白滝村ホロカ沢から出土した資料は他に類例のない資料で、黒曜石の尖頭器は逸品である。その他土器類の展示もあり充実している。このような資料館が北海道では各町村に建設されつつあると聞く。文化財に対する地元の熱意の入れ方に共感を覚える。本学所蔵石器の資料目録（本山考古室要録番号1129）に「北見国紋別郡上湧別村社名淵出土」とあり、本学資料との対比において多くの類似性を認めると同時に、地元の遺跡を実現して理解されることも多々あった。

翌日は再び本吉・佐藤氏のご案内で本学資料の

出土したと伝えている社名淵恵の谷を調査する。この周辺一帯は現在「北海道家庭学校」（社会福祉法人）の敷地になっており、大正3年施設を開設された折多数の石器遺物が出土したと伝えられる。恐らく本学資料もこの時に若干入ったのではないかと考えられる。家庭学校にも資料館が開設されており、本学と同様の資料が多数展示されており、同一出土資料との確信を得た。現在は全て遺跡は消滅してしまっている。この一帯の遠軽町は網走支庁管内のほぼ中央に位置し、医療、福祉、教育等施設の充実から、近隣7ヵ町村の中心的役割を果たしており、活気に満ち、消費、経済、文化面において将来の発展が楽しみな町である。

遠軽町を後に車は一路北へ向いオホーツク海沿岸へと出る。雄大なオホーツク海を眺めながら東へ下る。サロマ湖を過ぎたところ、常呂で下車する。東京大学文学部付属北海文化研究常呂実習施設資料館があり、トコロ貝塚及び周辺より出土した資料が展示されている。常呂川右岸にある朝日トコロ貝塚は、縄文早期から晩期までの遺物が発見され、縄文土器研究に大きな貢献をなした。またオホーツク文化期の住民の竪穴住居もあり、その生活文化が次第に解明されている。網走市へ続く道端に今から約1000年前の擦文文化期の竪穴住居址が多数明らかにされており、その一部を見学した。網走市を過ぎ斜里町立知床博物館まで足を延ばし、新装なった博物館を見学した。小規模ながら充実した展示で、地域の歴史、民俗に直結した資料により、社会教育に寄与しており、住民の期待も大きいようだ。

翌日は森岡昭・米村衛両氏（網走市立博物館）のご案内にて網走市内の博物館施設を見学する。



尖頭石器（旧紋別郡上湧別村社名淵出土）



北海道家庭学校（紋別郡遠軽町字留岡）

先ず網走市立博物館を見学する。緑に囲まれた高台にあり、静かなたたずまいを見せている。民俗、考古資料を中心に展示しており、オホーツク文化の資料は他館ではみられない貴重な資料が豊富に展示されている。また民俗資料では北海道アイヌ関係とそれに関連する樺太アイヌ、オロクコ、ギリヤークなど北方民俗資料から北海道と北方圏文化の関連がうかがえ貴重な体験を得た。続いてモヨロ貝塚館を訪れる。ここは発掘当時のままの状態を復原して、展示しており、オホーツク海沿岸の住民の文化や生活様式を一見で理解できるような展示である。縄文早期の貝殻文土器の出土状態が見られる。また前期の網走式土器と呼ばれているものも出土している。ここでも全国的にみられる埋葬状態として頭部にオホーツク土器の甕を冠し、胸に両手を組み、両足を腹の上に折り曲げた仰臥屈葬で、体軸方向はほとんど頭を北面に、骨盤を東南において葬られている（貝塚資料説明文より）。また熊の頭骨が大切に埋葬されている。

縄文壺形土器で本山資料要録に「北海道北見国網走郡網走町営林区署長庁舎敷地」とある資料につき遺跡の調査を行なったが、遺跡は既に消滅しており、現場の確認のみに終わった。

午後より名勝天都山に登る。ここには近年設立された「オホーツク流水館」があり見学した。モダンなチョコレート色の外観で、周辺の緑と良くマッチしている。内部に流水室を設置し、防寒衣を着用し、オホーツクの流水を実際に接し、肌で感じる。周辺の壁面を利用し流水のできるまでを解説し、映写室においては北海道オホーツクの歴史、風物が映写されていた。観光売店も広いスペースがあり珍しい北海道の特産物が売られていた。屋上へ昇ると眺望の素晴らしいこと、遠く網走



遠軽町先史資料館（遠軽町西1丁目）

湖・能取湖を望み、周囲の緑が一段とさえてくる。網走刑務所のカラフルな屋根も望まれる。快晴で一年でも最も良い季節だそう。最後は博物館「網走監獄」を見学する。日本で唯一の監獄博物館である。明治45年竣工の木造平屋建ての建築が多数残っており、日本の行刑史および北海道開拓史上の文化史的価値はきわめて高い。建築物は事務所群、舎房建築群、門類などである。

事務所は構造、意匠、技法ともに質の高い木造の官庁建築で、保存状態も良好である。舎房は少人数で看視し易いよう放射状に建てられ、ベルギーのルーヴァン監獄が模されたといわれている。内部は220室の独居房、雑居房で区切られている。その他行刑資料館が昭和58年建築され、激動する明治、大正、昭和の足跡と監獄の歴史が総合的に解説されており、歴史を語り継いでいる。中央の吹き抜けには網走市の上空を乱舞する白鳥群の立体展示があり、ユニークである。また敷地内には、森林公園、あひるヶ池、薬草園、水草園などもあり、一度は見物しておきたい博物館の一つである。

翌日は札幌学院大学で開催された「全国大学博物館学講座協議会全国大会」へ同会の委員長である網干教授と出席し運営等に当たった。そして研修見学会においてはサッポロビール園、雪印乳業史料館、札幌市資料館、北海道立近代美術館、北海道開拓記念館、北海道大学農学部附属博物館、同植物園等を見学し、多くの知識と資料を実見し非常に有意義であった。また多くの関係者のご指導、ご案内で予定通り調査が進行したことを感謝するとともに、誌上を借りてお礼申し上げます。

〔角田芳昭〕



オホーツク土器 左 後北C₁式
右 前北式宇津内II式

● 資料室移転

昭和60年9月1日より現在の簡文館（旧図書館本館）へ移転し、業務を再開している。資料室の使用床面積は展示室、収蔵庫、実習室、研究室、事務室その他を加え2,000平方メートル強である。展示室は充来の3倍となり、展示ケースも新調し、学内公開の体制も徐々に整ってきている。

● 昭和60年度新収資料

- | | |
|--------------|----|
| 1. 赤膚焼茶碗 | 1点 |
| 2. くらわんか茶碗 | 1点 |
| 3. 高松塚戸墳壁画写真 | 8点 |



くらわんか茶碗



考古学等資料室（簡文館内）

● 寄贈資料

- | | |
|-----------------------------|-----|
| 1. イラン古代土器 | 10点 |
| 加藤一朗文学部教授寄贈
(本文6・7ページ参照) | |



赤膚焼茶碗

編集後記

本学にも四季が巡りめぐって、100周年がやってきた。周囲の巨木は100年の樹令をただよわせている。考古学資料室も昭和29年開設されて以来、2回の移転を行ない、現在展示室、事務室、研究室、実習室、収蔵庫等使用床面積2,000平方メートルとなり、活動の場が広がった。この施設を有効に利用し、教育研究に活用していただけたらと考えました。

展示室における資料展示も順調に進んでおり、秋頃には学内公開も行なわれることであろう。4月6日に行なわれた校友会のスプリングフェスティバルにおける見学者の声も、早く一般公開してほしいとの要望が多くありました。

本資料室運営委員であり、文学部長の大庭脩先生が昭和60年度「学士院賞」を受賞されまし

た。ここに今回の栄誉を心より祝福申し上げます。

毎号原稿をお願いしている加藤一朗先生（文学部教授）よりイラン出土の土器の寄贈を受けた。そしてこの資料研究の原稿までいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

表紙の「壺^{つぼ} 鐙^{よう}」は馬具の部分で、鞍の両脇に1個ずつ取り付け、乗り手の足がかりにするものである。古墳時代には鉄、青銅、木製など種々の型式の鐙が作成され、古墳に埋置された。壺鐙はそのうちではもっとも新しく出現したもので、正倉院などに伝世する形式をへて、中世の長舌鐙に通じるものといわれます。本資料は関東地方出土とされ、昭和15年9月27日付重要美術品の指定を受けた重要な資料です。

〔角田芳昭〕